

星

外山 滋比古

増える「ハコ入りこども」

新山 2013.3.19

いまの子どもは幸せであろうか。当然のことながら意見はわかる。

そうだと言う人もあるが、かわいそうだとも答える人もある。子は恵まれていると考える人は、家庭が豊かになったのに子どもが少なくなつて、こどもに不自由はさせない、いくらでも上の学校へ行かせてもらえることなどを強調するのである。

それに対して、いまのこどもはかわいそだと思う人は現状を心配する。楽天的な人たちも耳をかたむけてよいところが含まれている。貧しくて子だくさんのかつての家庭では、こどもを食べさせていくのが精いっぱい、満足なことは何ひとつしてやることができない。こどもはたくましいから、ほしいものが手に入らないとおのずか

らハングリーの根性をもつようになる。ほしいものがあつても買ってもらうことができないから、自然に我慢するようになる。生きるのにこれが大きな力になる。

さらにこどもにとってありがたかったのは、大人たちが忙しくて心なきも放任主義で子育てをしたことだ。こどもは案外、のびのびと自由であった。

こどもはこども同士で遊ぶことができた。いろいろなこどもがあつたからての野性的なこどもが影をひそめた。大人の支配が強まって、こどもはこどもしさを失うようになつてゐる。

きょうだいがないというのは、ケンカもおこるが、こども同士でケリをつけることができた。ガキ大将といわれるこどもはこどもの子をこどもというには正しくない。

ケンカをとめようとして大人が口を出すと、「こどものケンカに親が出た、ワーカー」とはやし立て追い返したりする見識?をもつていた。

「ハコ入りこども」は外の風を知らない。うつかり出るとすぐ心のカゼをひく。不当に緊張して、とかく攻撃的になつたりする。そこのうのをうまくかわす感覚もないから、外はこわいとおそれる

こどもにとってケンカはいい経験になるのだが、いまの家庭にはケンカを容認する雅量がない。それなら、幼少年向きのスポーツをつくつたらいい。スポーツはルールのあるケンカで、正々堂々と競い合うことによってフェア・プレイという精神を養うことができる。そのこども版としてチルドレン・スポーツを発明すれば、少子化に悩む他の先進国にとつてもいい参考になる。

大人の支配強まり、「らしさ」を失う

少子化対策はカネやものではなくてはならない。

いのかもしれない。それくらいこどもはひとりだけでは自然ではないのである。

そんなことを知らない家庭は、

ひとり子だから大事に育てなくてはというので、家庭の中へとじこめて面倒を見る。昔、「ハコ入り娘」ということばがあった。世間の風にあてるとムシがつくと心配した親たちが娘を大事にしたものである。いまハコ入り娘はないが、その代わりではなく、「ハコ入りこども」がゴロゴロしている。

「ハコ入りこども」は友だちをつくるのが下手。仲よくすることもできない。ケンカするのももつまくない。ケンカするのほど苦手、だから、みんなで組んで弱いものをいじめたりするのである。こどもたちはみんなかわいい。子ども再生させる